

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ（二六）

第六五則 首山新婦

〔示衆〕

衆に示して云く、吒吒沙沙、剝剝落落、勾勾蹶蹶、漫漫汗汗。咬嚼くべくも没く、近傍なし難し。且らく道え、是れ甚麼の話ぞ。

〔本則〕

挙す、僧、首山に問う、如何なるか是れ仏（はなはだ新鮮なり）。山云く、新婦、驢に騎りて阿家牽く（是れ何の道理ぞ）。

〔頌〕

頌に云く、新婦、驢に騎りて阿家牽く（草木を拈出すことを勞せず）。体段は風流にて自然を得たり（描すことも成きず、画くことも就らず）。笑うに堪えたり、顰に敷う鄰舎の女（巧を弄して拙く成す）。人に向かつて醜を添えて妍く成す（笑いを傍観に取ける）。

むつかしい禅の公案の中でも、ツヤのある則があります。「倩女離魂」や「婆子烧庵」はその代表ですが、比較のお堅い則ばかり多い『従容録』の中では、さしずめこの「首山新婦」でしょう。でも、こういうとりつきやすいテーマ（則）のものが多ければよいのに、とボヤクのはおかどちがいます。公案集は禅の求道者たちに、禅の深旨参究のよすがとして編集された作品であって、通俗的な興味本位の読み物ではないからです。

さて、今回は示衆と本則が短いので、頌もとりあげて、『従容録』の本来のスタイルに近いものにしました。いうまでもなく、本則一〇〇を撰んでこれに頌（ほめうた）をつけたのは宏智さん、さらにこれに示衆と（一）中の著語コメントをつけたのが万松さんです。万松さんはこのほかに評唱をくわえているのですが、これはふつう省略されています。

「首山新婦」の首山とは、首山省念（九二六～九九三）のこと。『従容録』ではこの人の則は、ほかに第七六則の「首山三句」があります。省念は五代から宋代初めの人で、禅法を臨済・興化・南院・風穴・首山とうけついで中国臨済宗第五世にあたります。首山（河南省襄城県）に乾明寺を開き、ここで大いに禅風を掲げた英傑です。



わたくしが乾明寺を訪れたのは、一九八八年九月一日の暑い日でした。平坦な境内には、額殿、大雄宝殿、古仏殿など数棟が建っていました。中には何もなく荒れはてたまま。みな文革で破壊され、僧もいなくなったとの説明でした。ただ、復興の計画ありとのこと、すでに一年後の現在は復興しているかもしれません。また、それを祈ります。

この「首山新婦」は、省念さんが参学者に対する斬新な指導方法によって、活きた仏とは何かを示した一段です。まず、例によって「示衆」を意識してみましよう。

「タタササ、ドンくゴロく、ソヨくザワく、マンくイツパイ。こんな言葉は、かんでも味がわからんし、分別のモノサシでは計りようがない。これはいったいぜんたい、何のことかな？」

こんなところでしょうか。これは、つぎの本則をよびおこすための序言であり、参究者に力を尽くすようにとの老婆親切のことばなのです。では、中心をなす「本則」です。

僧「仏とはいったいなんですか。」
首山「ウン、それはな、花嫁がロバに乗り、そのたづなをシュウトメさんが引いてゆくようなものじ

や。」

おもしろいですね、禅問答とは。しかし、こんな木に竹をついだような答えがなされる場合は、すでに質問者もかなり修行がたけているときに多いのです。だから万松さんは、この問いのことは古いが中味は新鮮だ、とエールを送っているのです。僧は概念の仏ではなく、足下に活きる仏を必死で問うたのです。それに対する答えが、この公案の眼目。

新婦を花嫁さんとみて、これは花嫁道中のすがたとする解釈もありますが、わたくしは新婦を若妻の意味にとり、農作業などの道中風景に解釈したほうが自然だと思えます。とすると、それがなぜ活きた仏なのでしょう。そこで、宏智さんの「頌」をみましょう。

「ロバの背の若妻に、しゅうとめのタヅナ
なんと風流で、ありのままのすばらしさ

それにひきかえ、西施をまねた隣りの娘のおかしいこと
醜をかさねて美を消すとは、
お気の毒」

まあ、こんな意味でしょうか。「顰に顰う鄰舎の女」とは、古代に絶世の美女とうたわれた西施が、あるとき腹痛で顔をしかめた、それ



元代建立の首山乾明寺額殿

がいつそう美しくみえたというので、鄰家の醜女がそのマネをしたら、なおみにくかった、という古典のお話し。いうまでもなく宏智さんは、自然にকাশ出された風流をたたえ、美人のマネをした醜女をあわれんでいるのです。また万松さんのコメントも、この自然のままの風流さは描写できないほどだ、とほめたたえているのです。

してみると、宏智さんの「頌」は必見の親句なのですね。
もうおわかりのとおり、人間活動の中に生きてはたらく仏とは、分別や知解のはからいなき行為そのものであります。シュウトメと若妻の母娘同然、何のてらいもない自然のありさまは、お互いと思

いやりのこもった仲睦まじさのあらわれです。それは、一千年のむかしでさえ風流な一幅の絵でした。ましてや別居を前提としなければ、ほとんど結婚も成立しない現代の世相とは、まさに天地懸隔のちがい。いったい、人間はこの一千年の間に何が進歩したのでしょうか。

わたくしたちは、科学文明の恩恵を受けているあいだに、いつしか人間同士の本来的な美しさや尊さのころを忘れ去ってしましました。おそろしいことです。でも、人間同士の行為から学ぶ要素や環境はどんどん悪化し希薄化していますが、大自然だけは、いつでもどこでも「仏の素顔」をみせてくれます。

最近、わたくしはお恥ずかしい体験をしました。お彼岸中日の夕刻、高血圧症で倒れ、緊急病院に入院。翌日、病室から眺めた雑木林の美しさに涙があふれたのです。殺風景という分別をとり払うと、自然はみな人間よりエライ仏さんなんだという事実。正法眼蔵「見仏」巻に「仏の方からまみえる」とあるのに、知解分別でみずから閉目してはダメ。不断の精進により、必ず見仏が成就するのです。ともに坐禅を深めましよう。

《成道会》

―初発心がなにより大事―



平成一〇年一月二日、龍泉院本堂において、一六回目の成道会がとり行われました。成道会とは、お釈迦様が悟りをひらかれたことへの報恩の法要・行事です。

成道会のあと、椎名老師より、発心についての法話がありました。

お釈迦様は、発心によって出家され、この世のもの全てが真実の光に照らされている、というお悟りをひらかれました。発心とは誰でも起こすことが出来、また、仏教徒の眼目でもあります。

一六八八年、佐賀の武雄に生まれ、一一歳で出家した月舟さんも一六八八年、一六八八年で曹洞宗・田心寺の華岳和尚について一六歳まで修行しました。

ある時、許されて寺から生家に戻り、旧友たちから将来の夢を尋ねられ、月舟さんは次のように答えました。「百万石をくれたら、大名になって立派な僧を養成したい。」と。それを聞いた母はたいそう怒り、勘当を申し渡します。母親は何日も泣き明かし、目がつぶれたほどでした。月舟は母の思いを知り、どんな事があっても家に帰らず、修行に励みました。

母によって、月舟は本当の発心を起こしたといえます。夏でも蚊を追ひ払い扇子を持たなかったといひます。自分に対して厳しく、他人に対して優しい月舟さんは、書をよくし、たくさん書いています。全国の寺

でらに月舟さんの揮毫が多く残っています。月舟さんが揮毫された額は、火難に遭わないと言ひ伝えられており、近くでは我孫子・正泉寺に見ることが出来ます。

時は、ずっと下って、身近な知人の話です。韓国から駒沢大へ留学した金知見さんという人がいます。勉学を重ね、東大の博士課程でインド哲学、東洋哲学を学ばれ、中村元先生をはじめ日本屈指の学者のもとで学問を修めた人です。明日、韓国へ帰るという日の集まりで、「一〇年振りで七〇歳の母に会えるのがうれしい。」と挨拶されました。

韓国を出るとき、母から「日本で学位をとるまで帰るな。」と言われ発つてきたそうです。日本から手紙を出せば、「手紙を書く暇があったら、勉強しなさい。」と母に言われたそうです。発心した子も子ですが、母親の力も大きいですね。

また、唐代、趙州和尚は、六一歳の再発心によって、一二〇歳の晩年まで仏教を広めることに努めました。

初発心によって仏の眼が開くといい、仏の光に浴し、いい縁に会えるといひます。そのことを念頭に置きながら、龍泉院参禅会の道友・同志が縁を大事にし、育てることによって、道友のいい輪を広げていって欲しい、と法話の最後を締め



括られました。

点心は、松井さんが典座を務められ、心のこもった、食事をいただきます。

また、椎名老師には、嵩山より持ち帰られたさつま芋から苗を作

「成道会」典座に挑戦して

一、典座への挑戦

一泊参禅会の折々に、椎名御老師から典座教訓のお話を拝受しました。その教えは、道元禪師が弱冠二三歳にして、禪の源流を求め、中国の当時、宋の国に渡り、老僧・典座との出会いを縁として、「修行道場における食事を作る典座の役割がいかに大事なことから、料理することは煩わしいことではない」と宗教的・哲学的な見方において、私共に教えられているように理解しました。

また、私も、龍泉院の坐禅会には、はや数年の年月世話になり、参禅・禅定を通じて、生活に色々と潤いが加わってきたところであります。そのような時、昨年一二月の「成道会」において、その典座に挑戦する機会に恵まれ、感無量といったところであります。

人生の残りが徐々に短くなり、

り、その苗から採れたおいしいをご馳走になり、原種の味を楽しませていただきました。

最後に、刀匠の森岡さんが作られ、禅語を刻した文鎮を、くじ引きで四人の方に贈られました。

沼南町 松井 隆

何かと欲だけが先走り「あれもこれも、またあれも」と言う風に何にでも手を出したくなる悪い性でしようか、椎名御老師から貴重な典座教訓の教えを授かり、挑戦しない手はないぞと、年番幹事殿にお許しを頂戴し、このような次第になったのであります。

二、男子厨房の豹変

ここでは、お恥ずかしいのですが、私の料理との出会いについてお話しさせていただきます。そもそ「男子厨房に近寄らず」の男が、豹変する原因は会社の単身赴任であります。息子の高校入学と同時に私が東京に逆単身、大阪に家族を残し、その時「食事は全て自炊するぞ」の決意でありました。どうしてもご飯と味噌汁を欠くことができないため、そう決意せざるを得なかったのです。いざ料理を作ってみますと結構美味しくで

きるではありませんか。勿論、陰には我が女房殿のアドバイスも寄与しているのであります。

以来「為せば成る」の如く「男子厨房に近寄ること」に豹変したのであります。

再度の単身赴任は約一〇年後の大阪であります。この時は最初の体験を基に「単身者生活清規」に則り、品質とコストに着目し、二度目の腕前を発揮することになります。図々しくも、会社の新入社員を料理の味見人に仕立て上げ、休日の迷惑も厭わずに、我が単身ルームに呼び、「食事会」と銘打って、すき焼き、豚汁、手巻き寿司またはフランス料理等々、その時々々の新メニューに挑戦。未だ社会に出て右も左も解らない若者に「旨



盛り付けの手つきも鮮やかな松井さん

いだろう、どうだ美味しいだろう」と言い、快感を味わうこと十回余り、新聞の家庭料理欄に挑める程になりました。今は、この時の若者が、大阪を背負う程に逞しく成長し、会社に大きく貢献してくれています。この「食事会」のせいとは言わないまでも、料理を習い、この若者たちを知り得たことに大いに満足しているところでもあります。

従って、今更ながら、私に単身赴任を命じた当時の上司殿に、また心地よく単身生活に送り出し、一部指導をも担ってくれた妻に、深く感謝を申し上げるところであります。

三、典座の準備から本番

年番幹事殿にお許しを得たものの、「本当に三〇人もの食事を作るの、よく引き受けたね」と妻にたしなめられ、奮起心と不安の境地が絶えず錯綜する状態の中で概ねメニューを決めました。

次は、素材の入手であります。

「本来の典座にあつては、自らが料理の素材を吟味し入手しなければならぬ」にも拘わらず、たまたま「成道会」の二日前から会社の研修と、好きな遊びの誘いのため、またまた、買い物に妻に頼み込む次第となつてしまい、また妻



典座になりきる

に頭が上がらないのであります。そして「成道会」当日を迎えることになったのであります。

当日は、小畑大先輩と盛り付け配膳、茶碗やスケジュール等について簡単な打ち合わせ後、丁度八時に料理開始しました。料理内容は、煮物、和え物、ご飯にお汁といったところで、だしとりから始まり、材料作り、味付け等の仕込みにおける各プロセスに奮戦奮闘。この時が最も料理人にとってクライマックスを感じる時であります。とは言っても、手順が十分整っていたつもりですが、いざ本番となると、上手く運ばないこともありました。また、唯一応援していたく予定の小畑さんが、指を負傷されるアクシデント。いよいよ我が一人旅となりましたが、何とか

山を越すことができました。

突然の雲板の合図に、急遽、ご飯とお汁の盛り付けは、日頃しっかり典座をお努めいただいている、華やいた女性軍の応援を得ました。お陰様で、何とかぎりぎりに、無事、私の勤めを完了することができたのであります。

多分に味の方はあと一歩であり、関東の味には一寸薄味だったように感じました。何れにしても、心地良く食していただいた椎名御老師はじめ皆様に、深く感謝申し上げます。

四、感想

料理には、物を作る楽しみと、味わって食する喜び、色んな素材の選択組み合わせ、食事の環境との調和、費用や器との組み合わせ、さらには自然食とか健康管理など数多くの要素が含まれ、重なり合っているであります。料理人は、これらの要素を総合的に踏まえて、自らの技量と相俟って、演出するところに大きな魅力を感じ取れるように思われます。

また、少し大袈裟な表現になりますが、家庭での団欒や教育社会にまでも人の繋がりを広め、豊かにしてくれる「大いなる文化を創造する」楽しみでもあるように思われてなりません。今回は初めて

の経験でした。とても醍醐味とはいきませんが、大目に見ていただき、再度の典座に挑みたいと思っております。

典座教訓には「料理の専門家としての典座心」「整理整頓の心」「人に遇う心」「一茎草と一微塵の心」「喜心・老心・大心の保持」など色々多くのお教えが記されております。

常日頃、この典座として、料理人としてのポリシーを持ち続けて生きていくことに一層精進したい

四国歩き遍路

「腰掛し石に合掌遍路去る」仏教誌『大法輪』に載った句に引かれて、退職したら四国遍路に行きたいと思っていた。ある坐禅会に行く途中で、このことを話すと、Hさんも四国遍路をしたいと思っていたらしい。私より五歳年上だが体力も同じ位なので、同行を約束した。六、七年程して二人とも、退職し、本当に行く事になった。出発に当たって、一度しか行けそうにないので、修行としての遍路を出来るだけやってみようと思った。

歩き遍路の修行は路上に有り

ものと思う次第であります。

どなたか、この典座教訓に、そして料理人に挑戦し、一緒に体験してみませんか。

思いつくままに、典座経験を記してみましたが、過ぎる拙文をお許し下さいませ。

また、最後になりましたが、椎名御老師をはじめ皆様方に、このような貴重な体験を与えて頂いたことを深く感謝申し上げます。ありがとうございます。

柏市 安本小太郎

言われます。実際、札所のお寺は、三〇分位で立ち去り、ほとんどは歩いておりました。一番霊山寺から八十八番大窪寺へ、これより一番へのお札参りを入れて、約千四百キロの道程です。この中で、まだ残る美しい自然、四国の人々の歩き遍路への思い遣りと持て成しの伝統、多くの遍路の人々との触れ合い、美味しい水、食事に出会いました。その中より二、三を記します。

托鉢はなか／＼出来ないというので、初日から行いました。三番金泉寺を終えて、

大きな農家の玄関を開け、三〇歳位の若奥さんに、案内書通り托鉢の趣旨を述べると「どうぞ」と承諾を得ました。

案内書通り、右手に持鈴を胸の高さに持ち、左腕に数珠を掛け、左手を片手合掌、金剛杖を左胸にもたせ掛けます。(持鈴二音)「〇

〇家ご先祖様の供養と、ご家族皆様のお幸せを祈って唱えるは般若心経——巻——(持鈴一音)開経偈。(持鈴一音)般若心経(持鈴一音)光明真言三遍。(持鈴一音)南無大師遍照金剛三遍。(持鈴一音)回向文(持鈴一音)。托鉢をさせてもらったお礼、喜捨のお礼と進めます。

最初は六〇センチ位の上がり框に、若奥さんが二歳位の男児を膝の上に抱き、私共に正対しておりました。気が付くと、いつの間にか六〇位の姑さんがその後、四歳位の男児を同じく抱いて、正対しておられます。私共の誦経を、こんなに真剣に聞いて頂いて良いものかと恐縮しました。その一方で喜捨は貰えるかという気持ちも働いて来ます。この間、五分足らず。ポチ袋を頂いて、無我夢中で辞去したのです。ヤレ——と次の家までの路上で開けてみると千円も入っていました。

接待。四国遍路で地元の人に金

銭、物、宿等を施して頂くことで。四日目に初めて受けて以来、数え切れない程受けました。

その中の一つ。歩き始めて三日目五十五番岩屋寺に向かい、今日の宿まで三二・五キロを歩くことになる。(同行のHさんは四十一番でリタイア。)

一人歩き二日目。川添いの国道は緩いが常に上りです。昼食は長い旧道が美しい内子町の、旧家を改造した喫茶店で、コーヒートリストにしました。これまでだにご飯はお代わり、うどんなら大盛り二杯です。歩き始めて、これは腹が空きそうだと思ったが後の祭りです。一三時、車の男性より、チョコレートとポテトチップス一箱の接待を受けました。一五時頃国道の反対側に露店風の柿等を売っている所に差しかかりました。「あの柿くれないかな」と考えていました。すると「接待します」と五十代の女店主が追っかけて来て、大きな富有柿二個を頂き、やっとな通常の満腹感となりました。

ここまで修行をして来たので、この様なタイミングの良い接待が受けられたのだという驕りが頭を擡げる。また相当広い道の反対側の店に、接待を期待して、物欲しそうな視線を送ったのである。

次に同行のHさんとの人間関係について。男性二人だと宿は取り易いなど、便利なことの方が多い。だが人間関係、特に心の内となると別である。(宿等で出会った男性の歩き遍路は、例外なく一人であった。)札所での誦経の速度が遅すぎる。杖の使い方が悪い。果ては、そんなに大食では坐禅をしても何もならない等と、ズケ——言い出す。おまけに歳上なので宿では先に声を掛けられる。全て、言われ無きことではないので余計に悪い。顔に陰が出ているのがわかる。嫉妬心が動きまわる。

最後に八十八番を満願した、平成一〇年一月一日三日の日誌の一部を以って締めくくりとします。

「讃岐は涅槃の道場と言われる。九日を掛けて廻った。煩惱の火の吹き消された静かな状態を涅槃とする。五一日を掛けて一周した札所。途中、宿で色々な人に会い、様々な風景に接し、遍路の経験すべき事は一通り経験し、あまり動揺しなくなった事は確かである。ともかくにも歩き通せたのだ。大概のことには驚かなくなったと自分で思っている。こういう気持ちに涅槃とするのだろうか。本物にはほど遠いが、自分流の疑似涅槃か。滝行と野宿はしなかった。

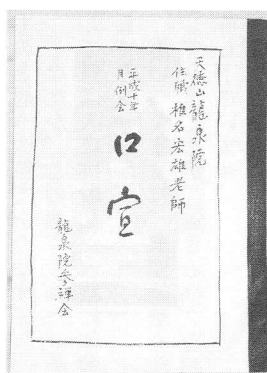
車への挨拶が、丁寧な頭を下げる方法になった。」

今考えると、のぼせ、魔境である。無所得の坐禅を続けるべし。

「口宣」冊子にまとまる

平成一〇年一二月、中寫さんの編集により、椎名老師の口宣集ができました。「口宣」は、坐禅の始まりに申す策励の言葉です。録音されたテープから書き起こし、校正、製本までされ、更に石田さんの書を織り込んで、冊子にまとめた上げた労作です。

初心者には、仏法用語を文字で確認でき、またベテランにとっては、忘れてはならない肝要なお言葉が収められています。道友のために大変お骨折りいただきました中寫さんに感謝申し上げます。



「どうだった？」

― 沢村国勝さんの追悼にかえて ―

柏市 武田 博志

道友、沢村さんの死去を知ったのは、去年の秋でした。思いがけぬ訃報を耳にしながら、真つ先に思い浮かんだのが、微笑みながら「どうだった？」と、私に向けた温かい眼差しでした。

後は、大きな笑い声をたてている様々なシーンがコマ送りの絵のように、目蓋に流れました。

十数年前、緊張して初坐禅に向かった日のことです。作法も、どういふことが半日の間に行われるかも分からぬままに、見よう見真似の時間が過ぎていきました。坐禅の後、ご提唱の席にっこうとしてうろうろしていた時、肩をたたかれました。

「どうだった？」

「足が痛いだけで、あつという間でした。」
「そう。」



お喋りのめつたに聞こえない会であつて、それは短くても十分意味を持った会話でした。

入門した頃、坐禅会は本来自己に向き合う人達の集まる場であるから、他者との関わりはあるはずがない、と思っていました。それは、禅の上辺を自分勝手に解釈したものでした。

ところが、思いがけず、初日に声を掛けてもらったのです。今は亡き、高間さんや、沢村さんの何気ないいたわりの一言が、後のち坐禅を続ける大きな支えになったのは、言うまでもありません。

参禅二回目のことです。茶話会は、一人ひとりの短いコメントが披露され、個々人の思いや考えなどを知るいい機会です。

沢村さんは、ひととき大きな声で、力強く、そして最後は、精進したいと思ひます、と結ばれた。散会し、長テーブルや座布団を片付け、各人が挨拶して帰っていく。その合間に、私は沢村さんに、無遠慮にも聞いてみた。

「沢村さんは、学生運動の活動家でしたか。どこかのセクトに属していたんですか。」と。

途端に、沢村さんは大声をあげて笑った。

「ハッハッハ、おれが……」

「そんな感じがしたもんですから」
「違う。違う。」

手を横に振って、しばらく笑っていた。二度目にして、そんなことを尋ねても赦してくれる大らかな雰囲気があった。

以来、十年が過ぎ、二回の摂心会を共にし、聞けば何でも教えていた。矢張りなどで見せる屈託ない笑顔があるかと思えば、参禅態度を率直に指摘し、周囲の空気が張り詰める時も何度かあった。禅といえば、龍泉院参禅会の様子しか知らない私は、その厳しい発言を率直に受け止めていた。

私は、「そうだ、そうだ。これじゃいけない」と身を固くした。他人の指摘は貴重です。世辞は嫌ですが、本気で相手の姿勢や態度を正直に伝え、戒めてくれる人は本当に有り難い。

それが、単なる嫌味や批判ではなく、心の底から相手への思いやりとして出た言葉は、重く、そして、温かい。

沢村さんが私と話す時はまっすぐ前に向き合い、目を見て話してくれる。大きな目は、すっきりして穏やかで、私はふと、持ったことのない兄とは、こんな感じなのか、と弟のように話しをしている

自分に気づく。

「これではいけない、もっと真剣に。」

度重なる厳格な発言は、いつも沢村さん自身に向けられていた。あるべき姿を絶えず求めて止まなかった、その求道の厳しさが推し量られる。

できるだけストレスになるようなことを避ける私と違って、自らを追い込んで突破口を見出す生き方を、私は沢村さんの本来持っていた逞しさだと思う。

その姿を、ただ見送るだけでは、私自身の生を粗末に扱うことになる。私は、あの穏やかな問いかけ、「どうだった？」

を、自らへの問いかけとして、反芻する。そして、禅を学び、さらに精進しようと参禅会の門をたたく若い人達に、沢村さんと同じ眼差しをもって接していこうとしています。

一周忌を済ませたばかりのご遺族が、家では家族を助け、禅問答を重ねるような会話をする楽しい人でした、と語られた。周囲の人に、たくさんの事を残して逝った沢村さんのご冥福を、ここにお祈りします。

合掌

龍泉院参禅会簡介

- 一、日時 毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）
- 一、坐禅 止 静 鐘 三声 坐禅
経 行 鐘 二声 経行
放 禅 鐘 一声 放禅
- 一、講義 木版三通 開経偈を唱えて『正法眼蔵』の提唱を聞く。
- 講師 龍泉院住職 椎名宏雄老師
平成一一年五月より「三時業」の巻を提唱予定
- 一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談
正午解散
- 一、参加資格 年齢、性別を問わずどなたでも参加できます。
- 一、会費 無料
- 一、成道会坐禅
月例参禅会の外に毎年一二月の第一あるいは第二日曜。（本年は一二月五日）
釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。
- 一、一泊参禅会
六月五日（土）～六日（日）、七柱の坐禅をし、ご提唱を聞く。

沼南雑記

参禅会記録（）中は座談の司会者
平成一〇年

●一〇月二五日 二一名
（石田 七重氏）

●一二月二二日 二一名
（佐藤 友則氏）

●一二月六日

第一六回成道会 二八名

導師 椎名宏雄老師
総幹事 小畑 節朗氏

●一二月二七日 二三名
（五十嵐嗣郎氏）

龍泉院スス払い

平成一一年

●一月二四日 二六名
（美川 武弘氏）

●二月一日

新年会 一七名

於・柏駅前芳野屋

●二月二八日 二六名
（添田 昌弘氏）

●三月二八日 三〇名
（松井 隆氏）

▼新年会の席上のこと。仏縁のない友人に尋ねられて、私が答に窮した「禅って簡単にいうとどういうこと？」に対して、先輩諸氏から侃々諤々のご教示あり。最後に老師の「茶碗は茶碗、箸は箸ということ」でピシッと決まる。その

後もメールを頂いたり。無知丸出しの私に道友の有り難さよ。

▼三月の御提唱中の「春在梅梢帶雪寒」に感じ入り、「谿聲山色」の巻をめくっていたら「谿聲便是廣長舌、山色無非清淨身」とあり。

又、「大地有情同時成道」というすごい言葉も。復習もたまにはいい。が、言葉に酔ってちやいけな

い？「禅は実践だ」という陰の声あり。桜に酔いながら（吾亦紅）

▼「散る桜残る桜も散る桜」良寛

▼前年度の年番幹事、寺田健二氏と加藤誠一氏にお世話になりました。今年度は、中寫宏誠氏と佐藤友則氏。よろしく願います。

▼内にあつては不況で失業者増大外に目をやれば北朝鮮の工作船侵入、コソボの戦火で大量難民発生の世界状況。大気中にはダイオキシン。何か尋常でない空気が流れている。他人も自分も大切な存在であることを思い起こせよ。

▼松井さんに典座の舞台裏を書いて頂いた。手際の良さは道理でという感想ですが、言うは易く、行うは難し。次の典座役大歓迎。

▼唯識に造詣が深い安本さんの稿は、托鉢の様子や心の動きが詳しく描写され、編者にも思い当たるふしがある。正直は行への第一要件かもしれない。

（佇泉）

●発行／天徳山龍泉院 千葉県沼南町泉81 0471(9)1609
●印刷／岡田印刷株式会社 柏市高田1116-45 0471(43)3131